

「68年世代」の修業時代

近藤 和彦

1947年愛媛県生まれ。千葉県立千葉高等学校卒、東京大学文学部卒、大学院人文科学研究科修士課程修了。名古屋大学助教授、東京大学大学院教授、立正大学教授を経て、東京大学名誉教授。専門はイギリス近世・近代史。

わたしの問い・研究といえば、卒業論文の頃から今に至る50年以上の研究生活で、ぼちぼち変化しました。1971年に大学院に入って社会運動史研究会の議論や、E・P・トムスン、安丸良夫といった方々から強い刺激を受けながら、自分の道を探しました。名古屋大学に職を得てからも同じです。ジャコバン的要素とサンキュロット的要素の区別と関係、両者の外周を包むリベラルな保守主義といった構図は、読みかえれば今も有効でしょう。1980～82年の留学でイギリスの大学と文書館事情を知り、その感想は「剣橋放談——18世紀イギリス社会史とその若手研究者たちの巻」(『イギリス史研究』33号、1982年)に、学問的には「18世紀マンチェスタ社会史——関係史料をどう捜すか」(『史学雑誌』91編12号、1982年)にしたためました。イギリス的な知の伝統に敬意を保ちながらも、日英の学問のどちらが上か下かというのとは違う問題意識を、ずっと抱えることになります。

長い反芻と咀嚼を経て、『民のモラル——近世イギリスの文化と社会』(山川出版社、1993年)

が出ました。これは18世紀社会文化史の単著で、〈歴史のフロンティア〉シリーズとしても意味ある出版だったと思います。しかし、70・80年代までに議論したことの一部を一書にまとめたに過ぎず、落ち着かないところが残りました。

1994～95年の在外研究は第1回日英歴史家会議(AJC)の直後でもあり、イギリスの歴史家たちと十分につきあい、自分を再考する機会となりました。「言語論的転回」の嵐が歴史学界を席卷した時期でもあります。『UP』や『思想』などに寄稿した小篇・コラムに、当時のわたしの迷いと試行錯誤が刻まれています。その後、『文明の表象——英国』(山川出版社、1998年)や新『岩波講座世界歴史16 主権国家と啓蒙——16-18世紀』(岩波書店、1999年)、そして『長い18世紀のイギリス——その政治社会』(山川出版社、2002年)の共同研究などを通じて一種の「脱皮」を経験し、それからは自分らしい仕事ができるようになったかなと思います。この間、1989年の学習指導要領の改訂以後、高校世界史の編集執筆にも関わって、個別研究と世界史教育との関連について考え／悩み続けました。

学者・研究者として確信らしきものを得たのは2000年代、すでに50代半ばでした。思えば子ども時代から晩生^{おくて}でした。『いまは昔——年譜・著作ノート』という私家版(2012年)も手がかりにわたしの修業時代を振り返ってみます。

1968年の延伸のような70年代

大学生の5年間あまりのイニシエーションが決定的でした。1966年に入学した東大の駒場の授業では社会学、社会思想史、政治学などが印象的でした。初期マルクスの実存哲学(城塚登)や、ヴェーバーの「世界宗教の経済倫理」(折原浩)、そして政治を学問として語る京極純一の授業は、ナイーヴな頭脳を魅惑しました。

ヴェーバー生誕100年記念シンポジウムの成果として、『マックス・ヴェーバー研究』という同題の本が東京大学出版会と岩波書店から出版され、大塚久雄という人が日本の近代的学問の心柱のような存在なのだと認識します。丸山真男でさえ、大塚の決定的な影響下に学問の枠組を形成したのです。ただし、大塚は1968年3月で定年退職。1967年秋学期の経済学部における講義が最後とのことで、(単位にはならないけれど)欠かさず聴講し、学生を目をみて説く、その迫力を身をもって感得しました。同じ秋学期の史学概論は柴田三千雄先生で、なぜか最初にヴェーバーを論じてから、文明史観とアカデミズム史学、両者の分岐、相克、「講座派」によるその結合を述べるものでした①。

テーマは特定できないまま、迷いつつ文学部西洋史に進学しました。上のシンポジウムに参加していた堀米庸三先生が西洋中世史なので、ヴェーバーの中世都市論を手がかりに何かをさがし当てたいという程度の気もちで西洋史にしたのです。1968年4月、ほとんどすべての授業がおもしろかった。先生方は旧『岩波講座世界歴史』(1968~71年)の担当章を執筆中か脱稿したばかりで、そのエッセンスを語っていたのでしょう。柴田先生の特講は出たばかりの『バプールの陰謀』(岩波書店、1968年)をふまえて、のちの『パリのフランス革命』(東京大学出版会、1988年)の予兆のような講義でした。成瀬治先生の演習はH・ローゼンベルクの『官僚制・貴族制・独裁』によるドイツ国制史=社会史で、

(近世という語はないまま)のちのお仕事へとつながるものでした。

北原敦、木村靖二、坂巻清といった研究室助手も、心強い先達でした。まもなく『思想』には北原論文「クローチェの政治思想(上)」が載り、さらに平田清明の連載が続くなど、『思想』は毎月フォローすべき身近な雑誌となります。

このアカデミックな蜜月は、しかし、6月17日に東大構内に機動隊が導入されて吹っ飛んでしまいました。文学部学生も7項目を掲げて「無期限ストライキ」に突入しました。秋には堀米評議員の「師弟関係の崩壊」という評論(?)が『中央公論』に載り、あわせて1960年の『歴史評論』における堀米・吉岡論争を読み返すにつれ、大学全体にかかっていた甘い霧のようなものが晴れて、鮮明にみえてきた気がします。東大闘争とはただ反権威主義の学生が「造反有理」で暴れただけと思われるかもしれませんが、とんでもない。学科討論や自主的な学習会で限りなく議論し、勉強し、書きました。

ちなみにずっと後年のこと、『イギリス史10講』(岩波新書、2013年)を仕上げたのは柴田先生が亡くなって2年後でしたが、できたばかりの本をもってお宅にうかがいました。朝子夫人が遺影の前に用意してくださっていたのは、わたしが「無期限ストライキ」の解除後に単位をそろえるために提出した講義と演習のレポート2本、43年前に出席ゼロのままはずかしげもなく出した物^{ぶつ}でした。400字×30枚の原稿用紙(横書)2篇で、1848年の革命情勢と、その敗北後のマルクスとエンゲルスを論評して、たっぷり脚註を付した幼い習作ですが、学部3・4年生の書いたものとしては(自分でいうのもおこがましいが)なかなかの力作です。それぞれ最初のページの右肩に鉛筆で「80」と記されています。「優」の最低点をつけて単位を与えるという先生の判断で、しかもこれは捨てずに保管しておき、夫人も何がどこにあるかを承知なさっていたわけです！

とはいえ、卒業論文は情熱と作文力だけで乗り切ることにはできません。

東大の図書館には(関東大震災後に英国国民から寄贈された)議会両院の議事録、歴史的文書委員会の報告書、18世紀の雑誌などがそろっていて、加えて1960年代から18世紀の冊子類の復刻が続き、また地方新聞のマイクロフィルムも坂巻助手が購入していました。これらを使って欧米の研究者と同じ水準の議論をすることは可能と思われ、奮闘努力の結果、卒業論文「産業革命前夜の民衆運動——マンチェスタ、1757～58年」ができたのです。イギリス社会経済史の蓄積から学びながら、民衆運動らしきものを掘り当てた習作にすぎませんが、これは改稿して『社会運動史』2号(1973年)と4号(1974年)に上下分載されました。

上と下で文体が異なります。これは「上」を読んだ岡田与好先生が社会科学研究所のお部屋に呼んでくださり、微細にわたって、これはどういう意味か、なぜこう書くのか、と対質してくださったお陰です。それまで合評会などはあっても、文章表現と論理のいちいちまで指摘する人はいなかった。岡田先生の部屋から解放され、全身の脱力感とともに社研の玄関を出ると、冬の日暮れ、樺の太木が空から暗く覆いかぶさっていました。

それから1970年代にあちこちした締め②、「1756～7年の食糧蜂起について(上・下)」(『思想』654・655号、1978・79年)、そして書評「原始の自由の衰退史」に触発されて(『年報中世史研究』4号、1979年)と翻訳「1790年以前のイギリスにおける社会運動」(『思想』663号、1979年)を書きました。前者は日本からもアクセス可能な公私文書(マイクロフィルム)を分析しての議論、後者2篇は「新しい歴史学」の旗手のような網野善彦と二宮宏之への論評／賛辞とトムスン小篇の紹介でした。これらを置き土産に、英国文化振興会の奨学生となりました。

ケインブリッジの歴史学

1980年8月、ケインブリッジ大学チャーチル学寮に着いたときにもくろんでいたのは、第1に日本でイギリス史のまともな研究指導を受けていない(と思われた)自分を大学院生として再教育すること、第2にE・P・トムスンの問いと70年代からの社会文化史の方法を、イギリスの厚い実証史学のなかでどう生かし、意味ある研究を展開できるかを探ること、第3に、付随的ですが、日本史でやっているような史料編纂ができるといいなという願望でした。

9月から、『穀物・カネ・商業』というモノグラフで知られたボイド・ヒルトン先生(わたしより2歳年長)のもとで、おもに論文表現に関わる指導をたっぷり受けました。ボイドはイギリス政治社会史の保守本流の人で、咀嚼するには年月がかかりました。ロンドンの歴史学研究所(IHR)にも自由に出入りできたので、つまみ食いのように各セミナーに出ました。進歩主義史観を崩壊させたネイミア史学に対する反批判がようやく勢いを得て、70年代から18世紀研究が隆盛を迎えていたのですが、ケインブリッジがその1つの中心でした。これについては別に述べたことがあります③。

18世紀における民衆の暴力(直接行動)を正面から問題にした——非難でも礼賛でもなく時代的な意味を問うた——という点で、トムソンはインパクトのある歴史家でした。『アナル』誌や『パースト&プレゼント』誌と揆を一にして、若い世代を圧倒的に喚起していました。東南アジアをフィールドとするジェイムズ・スコットの『農民のモラル・エコノミー』や『弱者の武器』も、トムスンの広い影響を示しています。2013年にハーヴァード大学で催されたトムスン『イングランド労働者階級の形成』の刊行50年を記念するシンポジウムでも、懐古を含めて、地球規模の喚起力が再認識されました。

とはいえ、18世紀の理解が増すにつれ、トム

スンのモラル・エコノミーという概念についても、(反フランス的)啓蒙思想嫌いについても違和感がつりました。民衆的要素を歌いあげて了とするのではなく、それがナショナルな枠をこえた政治社会でどう処遇され、変化の局面でどういう意味をもつか。詩人でなく歴史家であるなら、考えなくてはならないでしょう。1980年前後にはすでにケインブリッジのキングズ学寮においてI・ホントとM・イグナティエフの経済思想史プロジェクト——『富と徳』——がトムソンを批判していました。

18世紀都市史というジャンルも盛んでしたが、マンチェスタ史の新しい研究はなぜか出ないままでした。1714年以後の地域と中央の政党政治史、教会史、社会経済史の重なりがおもしろく(大塚史学の中核を衝くという意味もあり)、80年代を通じてマンチェスタ大学のダグラス・ファーニ先生にも相談しつつ、いくつかの局面を分析しました。18世紀前半の政党政治と教会人事と公共プロジェクトをめぐる史料を、マンチェスタ市、ランカシャー州文書館、ロンドンの公文書館や英国図書館(BL)などで収集し、ネイミア学派に負けないほどの人物カード^{プロット}を基礎に註を付しながら編纂してみました。Part Iだけで途絶していますが^①、わたしの英語の仕事のうち引用頻度の一番高いものです。

満天の星

振り返ると、修業時代のあと、今世紀に入ってから仕事の問いも、萌芽はすでに1980年の留学直前にあって、『史学雑誌』89編3号に寄稿した書評論文で国制(Constitution)＝国体を論じていました。また二宮宏之編『深層のヨーロッパ』(山川出版社、1990年)における二宮との対談では、「公共善」と「平民の善」という議論を立てていました。英語ではcommonwealth、大塚が「民富」というすごい／無理な訳をつけた概念でした。そうした点で、『民のモラル』以前の連続性は、ないではない。

実は1982年夏の最後の週に英国図書館(BL)の稀覯本室で、セレンディピティのように「マンチェスタと他の地における恐るべき群衆の報」(1715年)という5ページの小冊子に遭遇しました。後年の大きな展開の糸口になる史料ですが、『ヨーロッパ——国家・中間権力・民衆』(名古屋大学出版会、1985年)では史料紹介として全文を復刻し逐次解説するにとどめました。年月をおいて、『長い18世紀のイギリス』や編著『歴史的ヨーロッパの政治社会』(山川出版社、2008年)、共編著『礫岩のようなヨーロッパ』(山川出版社、2016年)、そして共著『王のいる共和政——ジャコバン再考』(岩波書店、2022年)を執筆しつつ想いおこされたのは、日本古代史の早川庄八の言です。80年代半ばに名古屋大学の史学科研究会で彼は、1つの史料にめぐりあうことによって「満天の星が輝き出すんですね」と感懐をこめて口にされました。これを他人事として聞いていた晩生のわたしは、ようやく還暦前後になって、かつてめぐりあった1715年の小冊子が、バラバラだった断片に歴史的な意味を与え、輝かせるという感覚に触れることができたのです。

このように、わたしの問いと研究は一本道ではなく、あちこちしながら、ぼちぼちと進んできました。その重要な折々に山川出版社のお世話になり、感謝しています。

①おそらく講義のもとにあった「日本におけるヨーロッパ歴史学の受容」は『岩波講座世界歴史30 現代歴史学の課題』(1971年)に所収。以下、お世話になった先生方について呼びつけにはできず、先生と呼ばせていただく。

②この頃を回想した拙稿に「70年代的現象としての社会運動史研究会」、喜安朗ほか編『歴史として、記憶として——「社会運動史」1970～1985』(御茶の水書房、2013年)もある。

③近藤和彦編／ジョン・ブルーア『スキャンダルと公共圏』(山川出版社、2006年)の序に当たる「18世紀イギリスとブルーア」pp.5～34。

④“The workhouse issue at Manchester: selected documents, 1729–35, I”, *Bulletin of the Faculty of Letters, Nagoya University*, vol. 33(1987)。

(こңどう・かずひこ／東京大学名誉教授)